



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## 勉強は、誰がすることなのか

小学校2年生の甥っ子は、このところ九九を覚えるのに相当苦勞している。苦勞というより、覚えるのをいやがっているといった方がいい。苦勞しているのは、周りにいる私も含めた家族であり、おそらく担任をしてくださっている学校の先生も、であろう。すぐ上の小学校4年生の兄は、根気強くつきあおうとするものの、「あかん、ちがう」ととがめるし、小学校6年生の長兄は、「実は、4の段と6の段、7と8の段が怪しい」と、私にこっそり耳打ちをしてくる。そこには、あからさまに言うと、「お兄ちゃんだって、宿題してないのに」と、両親からの「勉強しなさい」という矛先が自分に向けられてしまう、なんとかかわさねば…そんな力学が働くからだろう。

親の嘆きは相当なものだ。くりかえし唱えさせるように担任の先生から言われているのだけれど、がんばって唱えさせてもとんと覚えられない。一段、一段、足し算をしているから、それじゃあダメだというと、逆ギレされてしまうとのこと。困り果てて、学校教師である私たち夫婦に何とかならないかと相談のような、お願いのようなものがもちかけられたのだ。確かに、親子や兄弟であれば、容赦なくしつこくやらせようとするものだ。それでもできないと、ぐずったり、すねたりする結果となる。これでは、双方が不幸である。

こうして、当の甥っ子が私達のところにあずけられた。そこで、私達は、何がずっと言えて、何が間違っているのか、いっしょに見つけようかと、一つ一つ確かめることから始めた。

まず、おじさん、おばさんも、子どもの頃は、すごく苦手だったところがあったこと。ずっと怒られて、やる気をなくしたこと。悲しくなったけれど、こっそり自分で自分を確かめるようにして、自分はこれができないというのが見つかったから、それだけ覚えてみたら、いつのまにかできるようになったこと。すると、みんなはすごいと言ってくれたこと…。だから、こっそり、内緒で、やってみよう誘いかけ、そうかそうかとゆっくりと、つまづいているところを確かめていった。やがて、少し時間はかかるけど、なんとか一通り唱えることができるようになったとき、「ちょっと、待って、自分で確かめる。」と甥っ子はつぶやいた。少しして、「もうだいじょうぶ、できるようになった。」と知らせてくれたので、こちらも確かめ、みんなに披露した。

頑張った本人もすごいが、そこをなんとか教え導いた自分たちのことも認めてもらいたくて、みんなの前で、私はその甥っ子に問うてみた。「だれに教えてもらったの？」

すると妙なことを聞くものと言わんばかりの、そして自信にあふれた顔つきで、彼は答えた。「自分で覚えた。変わった。」

すぐに自分の手柄にしたがる私は、いやな人間だと、恥じらう一幕だった。